

鈴木有郷牧師説教

3/27/2011

命の水 ヨハネ4:7-15

イエスの時代に、サマリア人と呼ばれる人々は汚れた民族としてユダヤ人の嫌悪の的になっていました。ユダヤ人はサマリア人の村には近づかないように教育され、彼らと口を聞くことも禁じられていました。

この迷信を主イエスは断固として否定されました。彼はサマリア人の部落に平気で入っていき、そこの女性に語りかけ、井戸の水を飲ませてくれませんかと頼んでいるのです。

このイエスの行動は正に常識はずれもはなはだしい、驚天動地のものでした。サマリア人部落の井戸から水を飲む、それもサマリア人女性に許可を得てから。それに加えてこの女性は7人の男と結婚したことがあり、現在は他の男と同棲している、というのです。サマリア人の価値観から見ても受け入れがたい女性なのです。

しかし、主イエスはこの当時のユダヤ社会の常識に反することを堂々と行ったのです。彼のサマリアの女性に対する自然で開放的な態度は目を見張るばかりです。主イエスの態度にほだされたのでしょうか。女は答えます。「絶対渴くことがないように、その命の水とやらを私にください。」主イエスは答えます。「私とその命の水です。私を信じなさい。」

命の水とは何でしょうか。

命の水、それは無条件で包括的(つまりいかなる人も排除しない)神の恵み、恩寵です。私たちが悔い改める以前に私たちに差し出されている神の赦しの愛です。

この悔い改めに先行する神の赦し、これが当時の祭司長や学者といった宗教指導者達の反発を買ったのです。彼らは主張しました。神は悔い改めた人々だけを慈しまれる。悔い改めは赦しの必要条件だ。

彼らは神の赦しを獲得するために、食事の前に大げさな身振りで手を洗い、汚れた動物は口に入れず、女性とは公の場において口を聞かない等という600以上もの律法を厳守したのです。

彼らの神学は明らかです。神は人間をそっくりそのまま受け入れることはなさらない。律法を守ることによって神のご機嫌をなおした者だけが、赦される、と。

主イエスはこの立場を神の性格を誤解しているとしてきっぱりと拒絶されたのです。

何故か。人間は罪深い存在であり、神に対して自分を正当化することができると思えるのは思い上がりもはなはだしいからです。

ここで言う人間の罪深さをどう理解したらよいのでしょうか。次のように考えたらどうでしょうか。

私たちの心の中にあるもの一つ一つすべてが回りの人々に明らかになった、と想像してみましょう。私たちの心の中にある怒り、猜疑心、憎しみ、嫉妬すべてが暴露されたらと想像してみるのです。その時回りの人たちは、「この人はそんなに恐ろしい人間だったのか」と言って一斉に逃げていくに違いありません。罪とはこの私たちの内奥にある暗闇のことです。

この罪の問題は、私たちの意志や努力で克服できるというような生易しいものではありません。神の赦しだけが解決をもたらしてくれます。神の赦しなくして私たちは一瞬なりとも生きていくことはできない。これがキリスト教信仰の大前提です。

この赦しの思想は、キリスト者を現状肯定主義に追い込むのでしょうか。どうせ赦されているのだから、何もしなくていいという怠惰な信仰を生むのでしょうか。決してそうではありません。

主イエスを3回も裏切ったペテロを思い出しましょう。彼は3度目に裏切った時、主の眼差しを全身に感じたのです。「あなたは私を裏切った。しかし大丈夫だ。私はあなたを裏切らない。私はあなたと共にいる。」この赦しの言葉を心の耳で聞いて、その前にではなく、聞いた後に、ペテロは号泣したのです。悔い改めたのです。

そしてその後20年以上たって、この弱虫だったペテロは福音を宣べ伝えるためにローマにおもむき、そこで主イエスのために逆さ十字架にかかって殉教します。

命の水とは何でしょうか。それは悔い改める以前から私たちに与えられている神の赦しそのものです。

この赦しがあるからこそ、私たちは立ち上がることができるのです。赦しなくして私たちは生きていけません。赦されているからこそ他者を赦そうという、寛容で、いかなるがあっても他者

命の水である主イエスこそ、私たちを支える岩です。櫓です。勇気の源です。